

関東地区研究会報告

日 時：1996年3月13日

場 所：明治大学大学院

共 催：CFC研究会

出席者：相川良彦、石川雅典、磯辺俊彦、大澤正俊、小野澤章子、梶原真木子、
叶堂隆三、柄澤行雄、小林浩樹、駒崎研哉、新保 满、高橋明善、張 佩苓、
長谷川昭彦、松田苑子、マー・リン、皆川勇一、南 裕子、宮崎俊行、
矢野晋吾、山本英治、山本博史、山本昌弘、吉沢四郎、米地 實、李 国慶

日中比較をテーマに、中国人研究者が見た日本農村と日本人研究者が見た中国農村について、下記の2報告が行われた。

①李 国慶（慶應義塾大学大学院）

「日本農村の経済変動と社会的安定性

----長野県諏訪郡富士見町における産業構造と社会構造の変容----

②柄澤行雄（常盤大学）

「中国の「食糧問題」と農村・農民」

李報告は、中国農村の実情や問題を念頭において、1992年から1996年まで断続的に調査を行った長野県諏訪郡富士見町を事例として、日本の農村の社会変動を論じたものである。まず、調査地域の経済・社会変動の外生因と内生因の相互作用を分析し、諏訪地方の工業化を「より内発型の発展」であると位置付けた。そして、農村社会を経済圏、行政圏、日常生活圏から構成される一つのシステムとみなす枠組を用いて、諏訪地方が都市化や工業化の変動の中にありながらも、いかに社会的安定性を維持してきたのかを明らかにした。

討論では、自治体行政への肯定的評価に関して、そして村落の自律性のとらえ方および変動の諸局面でのそのあり方などについて質問が出された。そして、内発的発展という概念の意味、これと関連して変動論の枠組において内発的発展と外発的発展を対置することの妥当性について、さらには農村社会構成原理としての地縁・血縁関係の日中比較について議論がなされた。

柄澤報告は、近年世界的な関心を集めている中国の「食糧問題」をとりあげたものである。まず、「食糧問題」の発端、および中国の食糧供給について出された国内外の中長期的な見通しが紹介され、「食糧問題」についての一般的把握を行った。その上で現在の食糧生産の議論に移り、改革開放政策以降の食糧生産の推移が各種データにより示され、近年の食糧生産停滞、生産性低下、需給逼迫、耕地面積減少といった問題とその要因が指摘された。そしてさらに、このような現状や将来見通しに対する政府の食糧・農業政策の説明がなされた。以上のマクロな動向をふまえた上で、報告者が強調したのは、実際に食糧生産を担う現場の農民・農村の実態や動向に目を向け、それらを着実に把握し、そこから「食糧問題」を議論することの必要性である。所得向上と食糧生産の確保という二つの課題の達成が要請されている農村・農民の動向を解明していく系口として、農民の農業への投下努力の可能性、農業内での投下配分の転換、農村の工業化志向、人民公社解体後の基盤整備のための労働力動員の問題、都市・農村の二重構造など9点が指摘された。報告後は、双層経営についての質疑応答など農村での具体的な食糧生産体制の問題を中心に、各地のフィールドでの知見を交えて議論がなされた。